

大会に出す問題は、政治問題などはさげ、速記教育の重要性、青年は第二の国民で次の時代を背負う重大な使命がある。正義・人道といったようなことを主として出していったのでした。各地に行つて見ると、学生達が私のつくつた全国大会の問題を繰り返し練習しているので、これはよほど立派な問題を出さないといけないという責任を痛感するのでした。

昭和四十三年、第三十八回のときの問題は、人を紹介する時は何といつて紹介するかといった問題を出したのです。「人を紹介するとき、この人は立派な人である、この人は時間を守る人、約束を守る人、真面目な人、宗教心に厚い人・・・などいろいろ紹介するに適した言葉がある、しかし私はこういう言葉は使わない。この青年は速記青年である、そういう言葉も使いません。それではどういう言葉を使うかといえ、それはこの青年は親思いの青年であるといつて紹介するのです。親を思う心が親に対しては孝行となり、兄弟友人に対しては友愛の情となり、国家に対しては愛国心、学校に対しては愛校心といったように、その現われ方によつて名前は違うがみな親を思う心のあらわれである。皆さんは親思いの学生であるに相違いない、一層親を大切にしなさい」といったような問題を出したのです。

その大会の翌日です、国電に乗っていてまだ昨日の大会のほとぼりがさめず、いろいろ前日のことを頭に浮かべているときです。ふと考えついたことがあつたのです。それは「日本語の中で最もよい言葉は何であるかということでした。それは何かといえ、それはお父さん！お母さん！ということでした。よ